

『立命館地理学』創刊号に寄せる

大 迫 輝 通 (立命館大学地理学同校友会会長)
岐 阜 経 済 大 学 学 長)

この度、立命館地理学会が創設され、さらにまた、待望の機関誌『立命館地理学』が創刊されましたが、まずは、その門出を祝福し、今後の発展を心から祈念申し上げます。また、その第1号に、記念の辞を載せる機会を与えられましたことは、誠に有難く、光栄であります。併せて深く感謝申し上げる次第です。

ところで、甚だ私的な感懐を述べることをお許しいただくとして、一昨年、同校友会長就任の折の挨拶で、伝統ある立命館大学地理学教室ならびに同校友会の力を結集して、新しい活動を期待したい旨申し上げましたが、それは、そのころ私達は、そういう願望や期待を、折にふれ、しばしば話し合っていたからであります。それが、予想以上の速さで準備が進み、今回、その実現をみることになりましたのは、当時、既にそういう気運が高まっており、さらには、教室と同校友会に、それに対する十分な力が備わっていたからに他なりません。

地理学教室は、既に50有余年の伝統をもち、同校友会もまた、これに近い歴史(明年が50周年)があります。そうして教室の卒業生は約3,000名に及び、日本の地理学発展への寄与はもちろん、社会に大きな貢献をしています。

また、かつて、昭和20年代に、教室と同校友会では『地理学研究小報』(第1～4輯)を刊行していますが、この仕事が、40年も前、しかもそれが、第2次大戦後間もない昭和23年に始められていることを考えますと、当時の先生方や先輩達の御苦労と、教室発展への強い意気込みが伝わってきます。

このように、今回の新しい機関誌の創刊は、十分な素地があつてのことです。

先の『地理学研究小報』は、4ヵ年で終焉していますが、『立命館地理学』は、間歇的なものではなく、いつまでも継続され発展することを願って止みません。

“継続は力”とよくいわれますが、これはすべてに通ずる言葉のように思います。

今後、この機関誌が何十号と続くことによって、教室あるいは同校友会の真の力量が証明されることになりましょう。

今回は、新しく立命館地理学会が組織され、それが機関誌刊行の母胎となりましたが、この点が前回とは違い、固い基盤の上に立っており、将来の見通しをきわめて明るいものにしています。

今回の創刊にあたっては、教室の先生方に随分と御盡力いただき、短い期間に、学会設立、機関誌刊行の準備等々、大変な御苦勞をおかけしています。私どもは脇役で、応援の声だけを張り上げていた感があります。その御勞苦に対し、心から感謝申し上げますとともに、今後についてもよろしく願いたいと思います。

同校友会としては、学会と学会機関誌の存続と発展のために、できる限りの協力を惜しまないつもりであります。差し当たっては、1人でも多くの同校友会員がこれに参加（加入）することが、その発展につながるようになります。御協力をお願い致します。

最後に、この『立命館地理学』が文字通り新しいタイプの機関誌として発展して行くことを期待したいと思います。教室の卒業生が、社会の各界で広く活躍していることを考えますと、単に、限られた地理研究者のみの活動の場に終ることのないよう、学会員の誰もが、何等かの形で、気軽に参加、投稿できる場を工夫してほしいと思います。学術性の一方で、庶民性も併せて期待したいのであります。

今後、号を重ねて行くなかで、いろいろと工夫が進められましょうが、この点への志向もぜひ願いたいと思います。